藤田浩子の　少し昔のこと〈79〉

隣組

「とんとんとんからりと隣組　格子を開ければ顔なじみ　まわしてちょうだい回覧板　知らせられたり　知らせたり」私が子どものころ歌った歌です。

今でも隣組の存在する地域は多いでしょう。私の住んでいる地域も順番に班長になってゴミ当番の世話や、市からのお知らせを回覧したりしています。けれど、私が子どもだったころの隣組は国から決められた組織で、もっと「密」でした。というより「縛り」がきつかったと言ったほうがいいかもしれません。戦中はもちろん戦後もしばらくは「配給制度」で、食料から日用品まで「配給」でしか手にはいりませんでした。

お米や日用品などの物資が届くと、組長は「〇〇の配給で～す」と隣組の人たちに知らせました。お米は正式には配給でしか手に入りませんでした。

それも家族が十分食べるだけの配給があるわけではありませんし、お米の代わりに芋やカボチャが配られたり、大豆やトウモロコシが配られたりしました。配るといっても無料で配るわけではありません。家族の人数によって割り当てられた食料を、米穀通帳や配給切符を切って、公定価格で買うのです。分ける組長さんはだれからも恨まれないように気を遣ったことと思います。

隣組の組長さんの仕事は、配給以外にもいろいろありました。隣組の家族で出征する（戦地に行く）人がいれば、その出征を祝って（家族は喜ぶどころではありませんでしたが）ささやかな宴を開いたり、日の丸の旗を振って駅まで見送りに行ったり、英霊（戦死者）を出迎えたり、留守家族とバケツリレーの訓練をしたり、大変な仕事でした。

冒頭の歌はかわいい歌ですけれど、そんな隣組の結束を高めるために、国が推奨して子どもたちに歌わせた歌です。言ってみれば隣組は国の下部組織だったのです。

リレー連載 ＜212＞

わたしの大好きな絵本

Y.Y（NPO こどもすぺーす柏　ポレポレ）

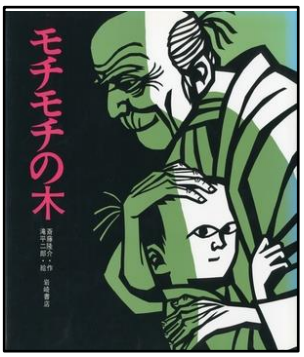
『モチモチの木』
斎藤隆介　作/ 滝平二郎　絵
岩崎書店

50 年前に出版され、今や小学校 3 年生の国語の教科書にも掲載されているお話。小心者の豆太に自分を重ねつつ、ページをめくり読み進めた記憶が鮮明に残っています。

滝平二郎さんのもはや芸術！と呼ぶべき迫力ある絵も、この絵本の魅力です。勇気のある者だけが見る事のできる「山の神様の祭り」である、雪明かりがともった美しいモチモチの木。絵本の印象が強烈なだけに、私にとってのモチモチの木はこの木以外考えられない唯一無二のものでした。

ところが、ある小学校４年２組の図工で読み聞かせをした上で「自分のモチモチの木を描く」という授業があり、クレヨンのスクラッチ技法で雪明かりを、木を別紙で描き切り取り貼り付けました。

時間をかけじっくり取り組み、出来上がった 25 人のモチモチの木の素晴らしいこと！子どもの創造力と個性溢れるモチモチの木に、まさに感動！！



私にとって忘れられない絵本となりました。